

日報抄

三十日、平年より十一日も早い史上最速タイ記録で、高田測候所がソメイヨシノの開花宣言を出した。高田といえは夜桜だが、いつも花冷えに震える。もう少し暖かくなっ

てからの方がありがたいのだが、開花宣言などこの気象台の係員はなかなか大変である。気象台や測候所ではソメイヨシノの基準木や標本木が指定されている。時季になると桜の木を見上げ「あと一、三輪かな」などとつぶやく。膨らみかけたつぼみの観察は、風流とはやや遠い。桜や梅、ススキの開花、イタヤカエデの紅葉など、植物の観察はまだまだしもしれない。気象庁には「生物季節観測」という業務があって、鳥や昆虫を初めて確認した日も記録している。ウゲイスの初鳴日、ツバメの初見日に、モンシロチョ

総合

12版

(昭和16年7月30日第三種郵便物認可)

(日刊)

ウの初見日もある。新潟地方気象台に聞いたところでは、生物たちがうめくころになると、郊外の原っぱや田んぼに出かけて耳を澄ませたり、目を凝らしたり、といったことが日課の一つになるそう。市街地から自然空間がどんどんなくなり、動植物の観察自体が難しくなっているとも言う。クマバチやセグロアシナガバチの観察は昨年からはやめたそう。自然の動きで季節を知る「生物(よみ)」は本来、地域や家庭で伝承されてきたものだ。「田かき馬の雪形が出たから田打ちを始めるか」。長い経験から生まれた生物(よみ)も、気温が一〇度以上も乱高下する異常気象下では狂いがちだ。季節は、やはり自分の肌で感じたい。生き物たちの早過ぎたり遅過ぎたりする行動は何かのメッセージだろう。丹念に記録すれば貴重な資料にもなる。

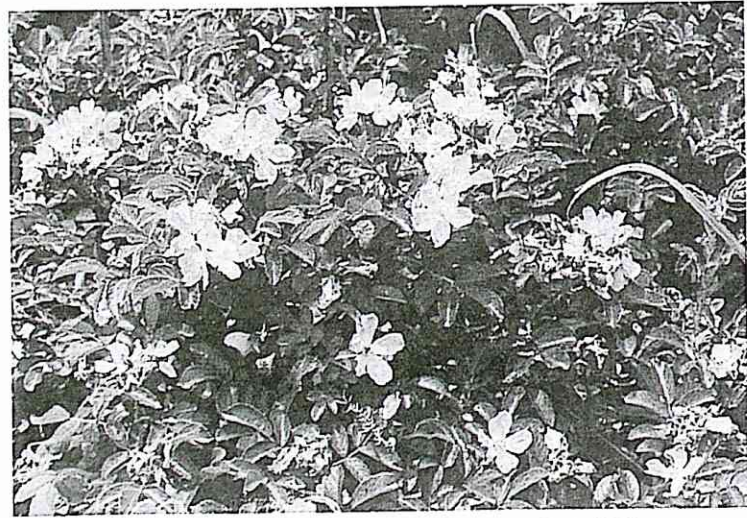
粟島のコハマナス

奈良場 正一

新潟県におけるコハマナスの記録は少なく、佐渡島に知られている。佐渡島では海岸だけでなく、大佐渡のアオネバ越のように山中にも生育している。

粟島の植物相調査(池上 1972)では記録がなく、新たな分布の追加である。

近年海岸の護岸や砂浜の消失などでハマナスの生育地も少なくなり、絶滅が心配される植物になってきている。コハマナスはハマナスとノイバラの自然に生まれた雑種といわれており、その生育株数は少なく、母種同様に絶滅が心配される。生育地が破壊されずに生き残ることができるように願いたい。



粟島のコハマナス 奈良場正一氏 1993 6 9 撮影